# 安保法制違憲訴訟

全国ネットワーク報

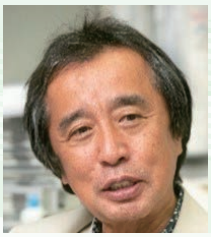
第6号


## 戦争は絶対にいけない、そのために 憲法９条の改悪を断固阻止する

特集

金平茂紀特別講演会

## 「ウクライナ戦争とメディア、そして日本国憲法」



「安保法制違憲訴訟全国ネットワーク」は去る9月19日の三連休の最終日、大型台風が直撃する中で、ジャーナリストの金平茂紀さんの講演会を開きました。寺井名誉代表の金平講師の紹介と冒頭挨拶のあと、金平さんはパワーポイントにもとづき、2時間近く一気にお話をされましたが、ウクライナの戦争現場を2度にわたって訪れた経験をもとにした内容はきわめて迫真性に満ちたもので、大勢の参加者に多くの感銘を与えました。

金平さんは最初に「寺井弁護士とは長い付き合いになるが、平和憲法を絶対守っていかないと駄目だとの基本的認識で一致している」と述べられ、「2022年の今年が歴史の分岐点である」と切り出されました。それは「ウクライナ侵攻と安倍元首相の殺害事件である」と明確に指摘されて安倍殺害事件はまさに「パンドラの箱が開いたものと位置づけられる」と続けられました。その後は、わが国憲法9条の根源的な精神を端的に語られ、自民党政権なるものが一時期を除いてわが国を支配してきたこと、その自民党と統一教会との密接な関係を諄々と説かれました。さらに大きなマップと長いスパンの中で時代を見つめることがいかに求められているかを強調された上で、安倍殺害事件を直視し、そこから何を学び取るか、安倍国葬問題をどう考えるべきかを問いかけられました。そして、ウクライナ侵攻のリアルな事実とロシア＝プーチンではないことを強調され、日本のメディアのあり方をストレートに批判された上で再び憲法9条と私たち自身の生き方について鋭い問題提起をされました。当日の講演は速記録としてまとめてありますが、その骨子を次頁以降の通り、編集委員会の責任で報告させていただきます。

講師の金平茂紀さんはジャーナリストとして大変有名な方ですが、報道記者としてTBSテレビに入局されて以来、モスクワ支局長、ワシントン総局長、本社の報道局長を経て、現在もジャーナリストとして報道現場の第一線でご活躍されています。早稲田大学の客員教授でもあります。

金平さんは安保法制違憲訴訟全国ネットワークのポスター（安保法制は憲法違反です―私たちは戦争を許しません）にご登場いただくなど私たちの運動を強く支援していただいております。

私たちは今回の金平さんのお話を深く受け止めて、わが国社会が置かれている状況をしっかりと認識し、必要とされる今後の闘いを真剣に考え抜いていきたいと思います。

**（編集委員会）**

# 金平講演の骨子

## 1 はじめに

本日はお招きいただいて感謝している。

寺井弁護士には僕ら報道の最前線に立って仕事をしている時に、いろんな法律的なものをチェックする貴重なご意見を頂き、親身になって相談に乗ってもらってきたが、その後も安保法制違憲訴訟の話を何度も聞いてきた。憲法についてはいろんな考え方があるが、これは絶対守っていかなきゃ駄目というのが一番大事だろうという基本的認識で僕たちは一致している。僕はそこが一番大切なことだと思っている。

## 2 分岐点としての2022年

本日のパワーポイントの最初のタイトルに、「分岐点としての2022年」と書いたが、今年がおそらくものすごい節目の年だっていうふうに何年か経ってからきっと位置づけられるだろうと思っている。それは端的に言って、「ウクライナ侵攻」と「安倍元首相の“殺害事件”」である。この二つの出来事はものすごく大きな出来事で、こんなものが相次いで内外で起きて、それに対してどういうふうな位置づけをしたらいいかっていうのは、今に至るまで定まっていないというのが僕の認識である。

分岐点の大きな2つのうちの1つはウクライナ戦争である。プラス、コロナ禍。コロナ禍は2020年の初めから3年過ぎるが、パンデミックっていう世界史的な出来事である。ものすごい数の人間が亡くなり、100年前のスペイン風邪と対比して語られることが多い。

ウクライナ戦争とコロナ禍が同時進行している中で、改めて国民国家って何かっていうことが問われている。領土を越えて、他の国が軍隊を送って、そこにいた人を殺して、インフラを破壊している。ウクライナっていう元ソ連領だった国が国民国家としてのまとまりを強めていったっていう皮肉な現象があるが、ナショナリズムがものすごく高まっている。

そして、正義論対平和論。このウクライナ戦争をどういうふうに見るかの対応の仕方である。正義を貫くためには、戦争しなければならない、自分たちの国民と領土を守るためには、戦争を辞さない、自分たちの独立を守るために戦争も辞さないという正義論。平和論は、これ以上、長く戦争が続くと人が死んでいく、これ以上人が死んでいいのかみたいな考えである。

正議論と平和論の対立というのは未だにある。日本国内では平和論の方は少数派となっている。

いずれ中国が攻めてきて、台湾と尖閣列島をウクライナみたいにされて、日本は次にやられるぞみたいなことを煽っている人たちがいる。ウクライナ戦争は僕らのあり方というのに凄く衝撃を与えているというのだ。

もう一つは、仮に「7・8事件」と呼ぶ。安倍元首相の銃撃殺害事件のことである。

あの事件によって、「パンドラの箱」がある意味で開いた。あの出来事が、政治的にも経済的にも社会的にも、ものすごい大きな変化というのを生じさせてしまったということは間違いない。

僕の立場は絶対戦争はしてはいけないというもの。戦争というのは、ものすごい被害を国民に及ぼす。

第二次世界大戦で日本だけでも数百万の人が死んで、沖縄だけでも数十万の人が犠牲になった。広島と長崎でも数十万の人が一瞬にして亡くなった。戦争の惨禍を一番知っているのは、実は、日本のはずだ。ドイツよりもイタリアよりも日本は最後の最後まで戦争をやることにこだわったわけだから。しかし、他国から侵略されたら防衛のための戦争はやむを得ないんじゃないかというような考え方っていうのは、今の若い人、特に戦争を知らない世代を中心にものすごい広がりを見せているというのも事実。この事実にどう向き合うかという問題もすごく大事だと思う。

## 3 憲法9条の根源的な精神

憲法9条の問題は、先の戦争での惨禍に対する僕らの真摯な反省というものが込められた内容だと思う。この憲法9条の言葉とか文言についていろいろ文句つける人がいるが、第1項にしても、第2項にしても、「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」って言っている。まさしく、崇高な理念である。今の戦争だらけの、特にウクライナ戦争なんか起きて今も続いているような状況から見ると、はっきりしている。「前項の目的を達成するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と明言している。

憲法は「国の交戦権は、これを認めない」って言っている。ここまではっきりと戦争放棄っていうことを謳っている9条は、厳然たる僕らの国のありようである。それを戦後77年間、変えてきてないわけだから。この9条ってものの意味っていうのは、今同時進行でウクライナで戦争が起きているから、この重みを本当に再認識すべきだっていうのが僕自身の考え方である。

## 4 政権与党の自民党について

これが一番今日言いたい大事なことなんだけど、日本の戦後政治っていうのは自民党っていう保守的な方向で進む政党がずっとやってきた。わずかの期間を除いて、ほとんど自民党が支配してきたのはこれは厳然たる事実。今度の安倍元首相の銃撃殺害事件は、その背景にある。ある種の構造っていうか、例えば、日本と朝鮮半島との間にある関係とか、日本と中国との間にあった関係とか、旧社会主義圏との間にあった緊張関係みたいなものを飛び越えた構造的なものというのをあぶりだしたと僕は思っている。第二次世界大戦が終わって社会主義圏対自由主義圏という中で日本はアメリカを選んだわけだから。日本が共産主義化、社会主義化しないための防波堤として、僕らの国っていうのは育てられてきた。その国づくりをしようということで、その中心的な勢力になってるのが自民党で、保守合同っていうのもそのためにやられたっていう歴史がある。この枠組みから出来上がったものが冷戦終結の後もずっと続いている。

## 5 自民党と統一教会との関係

ある雑誌で野党の著名な国会議員が、統一教会によって歪められた自民党政治みたいなこと言っている。これはまるで自民党が統一教会の特殊な思想によって歪められて、もともと自民党ってそうじゃなかったみたいなことにつながる。自民党が統一教会によって侵食された、被害をこうむったみたいな言い方。本当かと思う。明らかに間違いである。僕は自民党の持ってる思想の中核っていうのが統一教会と響き合っている、共振し合っている、お互いに利用し合いながら強めていったっていうのが、今起きてることの本質だと思っている。そのことをきちんと見ないといけない。そういう意味でも「パンドラの箱が開いた」と言える。政権与党が持ってきた思想の中核の部分は統一教会的なものだったと残念ながら認めざるを得ない。

東日本大震災とか福島第一原発事故の後に統一教会が言ってるのは、緊急事態条項を新設しなきゃいけない。次に言っているのは、家族保護の文言の追加である。家族は社会の自然かつ基礎的な単位。家父長的な、お父さんはこうやって、お母さんは家事をやって、子どもを作って、それを労働力の再生産みたいで、その単位が家族という。同性婚なんかとんでもない、LGBTなんて冗談じゃない。あんないかがわしいものっていうか、あれはもう亡国ものだっていう言い方を彼らはしている。これが自民党の2018年に作った素案のたたき台っていうものに緊急事態条項も家族法も見事に反映された。自民党の改憲思想みたいなものと、国際勝共連合あるいは統一教会の主張っていうのは一致するというか、共鳴し合い、お互いに高め合い、強め合うような関係になってきたっていうのが僕の考え方である。

## 6 自衛隊の憲法明記の問題

もう一つ重要なのは、自衛隊明記。まさに憲法9条に自衛隊を明記して何が悪いのっていう。2017年の段階で、国際勝共連合統一教会がこのことを言ってたのはものすごく大きな意味がある。

自民党の素案に先立って、彼らの方が先取りしてこれを言っている。その間をつなぐ議員たちがいた。山谷えり子とか、下村博文などの文教族。安倍晋三もそうだった。清和会（安倍派）の人達がこれを強く自民党の素案に反映するような形で働きかけを行っていた。現実的に元信者とか、そういう人たちの多くが証言している。「パンドラの箱が開いた」っていう安倍元首相の銃撃殺害事件がなかったら明らかにならないものだった。

## 7 大きなマップと長いスパンの中で時代を見つめる

僕らメディアっていうのはとっても近視眼的になりがちで、今起きている事、今、目の前で起きていること、昨日のこととか明日の事、今日の台風の報道とかはやるけども、それをもっと長い目で見る機能っていうのは今恐ろしくジャーナリズム、メディアから失われている。時代を見つめる座標軸みたいなものっていうのはものすごく大事なことで、英語で言うとマッピングっていう。マップって言うのは地図。大きな地図の中で、自分たちはどういう位置にいるのかっていうようなことを探ってみる作業はものすごく必要で、大きな中で今、日本ってどんなところにいて、どういう方向に進んでいくのかみたいなことを考える作業である。それで言うと、僕がとても面白いなと思ったのが、白井聡っていう学者。東大で今ちょうど、この時間に国葬反対のシンポジウムやってるが、戦後77年と明治維新が始まってから近代戦争が始まるまでが77年。ちょうど折り返し地点という。明治維新から敗戦までが77年で、そして戦後敗戦してから、ちょうど今年で77年。僕はこういう視点っていうのはなかなか持ち得なかったが、もしかすると今年が節目だって意味は、来年から「新しい戦前」が始まるんじゃないかとも考えさせられている。あともう一つ、50年という半世紀ぐらいのスパンでこう考える時に、今から50年前の1972年。この1972年に起きたことと、その50年後の2022年に起きた事っていうのを比較してみると、いろんな意味で隔たっているが、シンクロっていうか、あの時とこれ同じみたいなことが起きてる。僕は1972年は高校3年生ですごくよく覚えているが、まずあさま山荘事件。1月末から2月にかけて、軽井沢のあさま山荘に連合赤軍が立てこもって、ここで機動隊による突撃作戦があった。そして毎日新聞の西山太吉記者の事件。彼が沖縄の返還に関する密約文書っていうのを暴露して、その入手方法っていうのは、蓮見喜久子っていう外務省の女性事務官からだった。

西山記者は逮捕されて、一審では無罪だったが、控訴審でひっくり返って、最終的には最高裁でも有罪になって、退社を余儀なくされた。ひどい話だった。西山さんが訴えたことは国家が嘘ついて国民を騙していたわけだから、非常に本質的で正確なことだったと思っている。

そして、50年前の1972年には沖縄が返還された。この時の、「核抜き本土並み」というのは、沖縄の人たちにとってはようやくこれで日本国憲法が沖縄にも適用されて、基地のない平和な本土並みの地域になるっていうふうに信じていた。ところが、返還されても基地の機能は維持されて、かえって返還時よりも米軍基地の割合というのが増えて、本土にあった基地をどんどん沖縄に押し付けられてきたっていう歴史があって、これひどいことだったが、その起点になったのが1972年。

1972年というベトナム戦争の真っ盛りだったが、沖縄からB52が発進して空爆して帰ってきた。沖縄はある種、爆撃機の出撃基地になってた。そこで基地経済みたいな形で非常に歪んだ経済がずっと続いてきた。そこを何とか脱皮したいっていうことで、その後半世紀にわたっていろんな知事が訴えたけれども、日本政府は全く耳を貸さなかった。

田中角栄内閣が成立したのも72年の7月7日だった。第一次田中内閣での狂乱物価、今とそっくり、ものすごいインフレが襲って、トイレットペーパーの買い占めに走った。僕、高校3年の時だったからよく覚えてるが、親とかがみんなスーパーに買い占めに行った。トイレットペーパーがなくなったんだから。今で言うと、アベノマスクが配られる前にマスクがなくなって、みんな大変な目に遭ったみたいな風に言ってるけど、それにしてもこの狂乱物価っていうのは、50年を隔てても同じようなことが今、起きているっていうことがある。

田中内閣が発足して以降まもなく日中の国交正常化50周年。おそらく戦後のこの瞬間っていうのが日中関係が

最も善隣友好度が高かった瞬間である。田中角栄って人はロッキード事件で、もちろん失脚して、金権政治の代表みたいになった。僕はロッキード裁判を担当させられたんでよく覚えているが、彼が一審で実刑判決を受けた時、僕は法廷から飛び出して第一報を出した。半世紀経って、日中関係の実情を考えた時に、田中角栄という人が外交的な成果として、日中国交回復を成し遂げたっていうのは、すごく大きなものがあったと思っている。これは客観的な成果として、すごいことであった。これは安倍晋三っていう人の外交的成果がゼロだったことに比べ、とんでもない成果を出したということである。この日中国交回復によって、上野動物園にカンカンとランランのパンダが来て、中国語を習う学生がいっぱい増えた。要するに中国ブームになった。その後に残留孤児の人が帰ってきた。ある種、日中の関係修復みたいなことについてものすごく進んだ年だった。そのスタート地点が1972年だった。その時に流行ってた歌はあの小柳ルミ子の「瀬戸の花嫁」とか、ペドロ＆カプリシャスの「別れの朝」とかっていうのがカラオケで歌われていた。

## 8 安倍殺害事件のこと

安倍元首相の銃撃殺害事件をどう考えるか。多くのマスコミは思想的、あるいは政治的な表現の「暗殺事件」という言葉を皆使ってない。僕は「7・8事件」って呼んでいるが、いずれその位置づけみたいなことは、歴史学者が評価するだろう。この日の僕はいろんな思いをしながら取材にかけ回った。官邸に行って岸田首相に質問もした。自民党本部に行ったが、誰もいなかった。これみんな気づいてないかもしれないがこの日は、伊藤詩織さんの最高裁判決が確定した日だった。そしてその前日に、あの赤木雅子さんっていう森友事件の夫を自殺で亡くした人が、安倍首相と会っている。これはあまり大きく言えないが、2人はグータッチしている。いずれその映像は放送で出そうと思っているが、雅子さんは手紙を渡す。「しっかり調査してください」っていう、あの森友事件である。SPがバーってきて、その手紙を引き取ったが、その翌日に安倍さんは殺された。

これは戦後史の中で最大級の刑事事件だと思っているが、実は今、山上被疑者は鑑定留置中である。今、そこで彼は何をされてるのか。法曹界、司法界に関わっている人たちは、現在の弁護士2人をきちんと強力に支えて、何がなされているかってことをちゃんとチェックしないといけないと思っている。「頭のおかしな人がやっちゃった突発的な怨恨に関する事件」として、あらゆる政治的、社会的な背景みたいなものがおそらく明らかにされないまま葬られる可能性っていうのがあると思っている。首相経験者及び首相が殺されたっていうのは、1932年の「5・15事件」と1936年の「2・26事件」以来だ。犬養毅と高橋是清ら、これは軍部が暗殺しちゃったわけだから。問答無用で見つけてピストルですぐ殺したんだ。今度の場合はこれとは明らかに違う。

## 9 安倍事件から何を学び取るか

ここから何を学び取るか。旧統一教会と自民党との構造的な癒着っていうのは、これは今に至るまでずっとやっているが、メディアによってやっぱり濃淡がある。一番駄目なのは、NHK。何やってんだと思う。あのNHKと同じなのは臆病だったが朝日新聞も同じ。朝日も当初は立ち上がりが弱くて、いろんなことを言う人がいるが、これはあの赤報隊事件に由来している。霊感商法をものすごく叩いたのは、朝日新聞の発行してた朝日ジャーナルっていう週刊誌だった。これは筑紫さんが編集長だったが、その時に一番戦闘的にやってたのに、その後になぜか朝日新聞の幹部と世界日報っていう統一教会系の新聞社の編集長が手打ちをした。会食付きの会合を持って、そこでこれ以上お手柔らかにみたいな感じで、それがいろんな意味で響いてんじゃないかということを言っている人がいる。

あとは亡くなった後の安倍氏に対する評価。気の毒な非業の死を遂げたっていうのは、これは誰をも認めたが、だからといって、彼の政治家としての功罪みたいなものについてはもう触らなくていいんだみたいな雰囲気が出てきている。特に彼の罪の部分、負の部分については検証する必要がないみたいな形にして、「国葬」という動きっていうのが現実的に出てきた。あるいは「安倍さん素晴らしい」、「安倍さんありがとう」みたいな形の、ある種の神格化、あるいは正当化が図られるっていうような過程ってのは、これは民主主義国家にとってはとても危険なことだというふうに僕は思う。

「パンドラの箱が開いた」っていうので空気が変わったのは間違いないが、僕はどういう人がどういう発言しているのか、なるべくいろんな人の意見と顔を注意深く見るようにしている。8月12日に作家の辺見庸っていう人が少人数の講演をやった。ここからすぐそばの新宿文化会館。そこで、生活クラブ生協という小さな集まりの読者が集まって。そこで彼が講演したんだけど、その時ね、彼はこういう事を言ってた。「山上という青年のしたことは、近視眼的には間違ったことだ。だが、歴史を考える人間を深く揺り動かす何かがあったと思わざるを得ない」。これは相当、このことを言うだけでも相当な勇気が必要だったと思う。彼自身が半身不随でリハビリだから、車椅子に乗って講演に来たんだけど、この事を言うだけでもかなり勇気を持って来たんじゃないかなと思う。この事件で旧統一教会と政治の癒着が露わになったんだけど、今、「何とか蓋をしたい」っていう動きがある。点検と称する自民党の自己申告制なるものの調査があったけど、あんなものは全然デタラメ。本当に酷い。「安倍元首相の功罪を検証する機会っていうのは、もうなくなったんだし、本人に聞く機会もないからみたいなことで、何もしない」っていうふうに岸田首相も言っている。

## 10 国葬をどう考えるか

あともう少しで国葬がある。残念ながらこれは確実に挙行されるだろう。どんなことを言っても、もうこれはやられる。この後にどういうふうになるのかなと思っている。今日か明日にはエリザベス女王の国葬がある。それは非常に厳粛な形で国民があの棺を見送るためだけに徹夜で並んでいる。そういうものとの交差みたいなものが露わになるような形になるのか、あるいはそのエリザベス女王の国葬があまりにも素晴らしいから、自分たちでもああいうことをやってみたいっていうような、ある種願望みたいな。人を悼んで送るっていうのは、それ自体は人間として美しい行為だ。しかし、さまざまな問題を孕んでいるっていうことがある時に、この安倍さんの国葬というのはどういう評価を元にして行われるのか、これは、終わってみないとわからない。

国葬になった時、棺を前にして、そんなに罵声を浴びせたりすることって、人間ってなかなかできない。そう、それは死者に対する尊厳っていうのがあるから。人間としては変なことはしたくない。変なことはしたくないけど、前提のところで非常に問題が多い。なんで内閣葬とか、有志の国民葬、自民党葬でいけないのかっていうのは、未だに議論されている。国葬反対の意見が60％以上、賛成は30％台だというのが世論調査だ。「安倍さんはモリカケ問題や桜を見る会など疑惑が多い。集団的自衛権を強引に成立させて戦争できる国にした人間だ。そのためにも何故高額の税金を使うのだ」というのが大きな理由のようである。この後に、政治経済社会が安定的な方向に進むとは僕には思えない。安倍氏の事件の後に、大きく揺れ動くきっかけみたいなものを国葬問題が用意したと思っている。

## 11 ロシアによるウクライナ侵攻

ロシアによるウクライナの侵攻ってのはまだ終わっていないが、すごく歴史的な出来事である。僕は45年間、テレビ報道の仕事をやってきて、いくつか歴史の切断点っていう出来事に立ち会ってきた。切断点という意味は、その出来事が起きた前と後ではもう決定的に後戻りできないぐらい何かが変わってしまう。

例えば同時多発テロ事件。これはニューヨークのツインタワービルにハイジャックされた飛行機が突っ込んだ事件で、僕はリアルタイムでその時筑紫さんの「NEWS23」の編集長やってたのでびっくりした。そして、その前と後で全く状況が変わった。アメリカで「テロとの戦いが国是」になって、全く違うアメリカになった。

「ベルリンの壁の崩壊」、あるいは「中国の天安門事件」。これも僕はよく覚えているけど、6月4日の天安門事件の前と後では、中国は全く違う国になっちゃった。新型コロナウイルスのパンデミック。これだって今マスクしないで町歩けないじゃないか。沢山の人が集まってワイワイやるって事がまるで悪いことになってしまった。要するに、その前と後では明らかに違う、歴史の切断点ってあると思う。もっと言うと「地下鉄サリン事件」もそうだ。その前と後でやっぱり決定的に違った。今、街頭からゴミ箱っていうのがなくなっているが、この事件がきっかけ。どこの国だって、大都市には、ゴミ箱がある。日本ではターミナルとかそういうところに行くと、透明な分別されている駅とかあるけど、街頭にゴミ箱がないのは、実は地下鉄サリン事件がきっかけ。一気になくなった。

東日本大震災と福島第一原発の事故、僕はあの前後、現地で取材して何ということが起きたんだっていうふうに思った。あの前と後で決定的に何か変わってしまった。原発に対する国民の評価ってのは変わったと思うんだけど、それでも最近、再稼働しようみたいなことを岸田が言い始めた。歴史に対する冒涜っていうかね。歴史から何を学ぶっていうことに関して、今の政権を担っている人たちは何を考えているのか、悲しくなる。ウクライナのロシアによる侵攻っていうのは、これは紛れもなく侵略戦争だ。独立国に対して国境を越えて、他の国の軍隊が入ってきて人を殺してインフラをめちゃくちゃするわけだから、許されていい訳は絶対ない。ロシアにおいてはいまだに戦争って言葉を使うと罰せられる。ロシアのニュースで戦争って言葉を使っちゃいけない。馬鹿げてるよ。特別軍事作戦って言ってる。何言ってんだと思う。ところが、戦争という言葉を向こうのキャスターやアナウンサーが言った瞬間に収監されちゃう。罰せられる。だけど、他人事だと思ったら大間違いで、実は、日本の国の歴史の中でもそういうことがあった。例えば上海事変とか満州事変っていうのはまさしく、戦争じゃないか。その時に日本政府は何を言ったかっていうと、自国民の防衛安全保護っていうのを理由に、自衛とか平和維持っていう名目で侵略軍を送ってきたっていう歴史がある。だからプーチンのロシアについてひどいことしているなって言うけど、残念ながら僕ら日本の国の歴史を振り返ってみると同じことをやってきた。だから、僕らはそのことを学ばなきゃいけない。ロシアのことも絶対に許してはいけないっていうのは、僕ら自身が同じ間違いをしたから、なおさらそのことを声を大にして言わなきゃいけない。しかし、現実にはそれがなかなか出来ていない。

もう一つは、冷戦終結っていうのは一瞬にして終わるもんじゃなくて、時間をかけてずっと続く。「今が冷戦終結の最終段階の出来事」なんだっていう言い方。これは例えばフランスの思想家のジャック・アタリとか、そういう人たちが言ってるんだが、僕は冷戦って、実はそんな簡単なものではない。

もう一つ大事なことはウクライナの歴史を知ること。歴史を知ることっていうのは、ものすごく大事なことで、単純なことじゃない。僕は、ソ連邦の一部だった時代のウクライナに何度も行った。僕がモスクワ支局長時代の右腕っていうか、助手の人はウクライナ人で、彼の故郷に何度も行った。取材にも行ったし、休みも兼ねて自宅にも行ったが、凄くいいところで歓迎された。ウクライナは豊かな農業地域でね。だけど、その時はロシアと仲良かったから、とってもいい感じだった。要するに同じ国民だったのが、今はお互いに殺し合っている。そういう歴史がある。最低限そのことぐらいは知らないと困っちゃう。

## 12 ウクライナ侵攻当日のこと

僕自身は、2月24日、実はトルコにいた。朝イスタンブール空港からウクライナに入ろうとしたらいつまで経ってもトルコ航空が飛ばない。ちょうどその瞬間にウクライナへの侵攻が始まったから。僕は絶対にロシア軍は侵攻すると思っていた。だから絶対ウクライナに行かなきゃ駄目だと思ってもう無理やり行こうとした。カメラマンと一緒にいたんだが、戦争が始まったから飛べなくなっちゃって。だから陸路で行った。ルーマニアに行って、ルーマニアから車で行った。僕は、ロシアは東の方のドネツクとかルハンスクっていうところに攻撃すると思ってた。そしたら何を勘違いしたのか、あのプーチンのロシアは南の方のクリミアさらにベラルーシの北側から、さらに自国の東側の三方向から一気に攻めたてた。これ、めちゃくちゃ。全面戦争だ。こんなことやるって僕は思いもよらなかった。ロシアはウクライナを甘く見てて、三方向からやれば一気に降伏して1日で終わりと思ってたんだと考えた。

ところが、そうはいかなかった。しかもロシア軍が三方向からやったが、軍の力が3分割されちゃったんで、勝つことができなくて、泥沼になって今に至っている。現在、戦争が始まって7か月目に入っている。僕がウクライナに着いた日は2月25日。みんな逃げてくるんだけど、全部が女性と年寄り。男は国民総動員令というのをかけられてるから出られない。女性と子供と年寄りばっかりがダーって逃げてきて、この写真は僕が最初に入った街の様子だが、大変だった。これは僕らがいた場所で防空壕。空襲警報がきて防空壕にいた時の写真だが、これが映像になってる。これは僕がスマホで撮ったんだが、地下のコンクリートで何にもないところだった。この人たちはこうやって近所の人を誘い合って食糧を持って子どもたちが来て、猫とか犬とかも連れて来ていた。しょっちゅう空襲警報が鳴るもんだから、最後の方はもう慣れちゃって空襲警報がきてもみんな驚かなくなるぐらいだった。ある意味で言うと、混乱なく秩序正しくみんな避難してたね。

僕らはホテルが全くなくて、地下壕の従業員寮みたいなところに泊めてもらったけど、ここを根城にしながら取材を続けた。

2週間ぐらい滞在したが、寒くてね。寒くて寒くて、雪も降ってるし。寒いから足踏みしないと足の感覚なくなっちゃう。あっ、戦争が起きるっていうのはこういうことなんだ。ところがね、感心したのは、赤ちゃんを連れた女性が来ると、みんな黙って大事にする。僕はびっくりした。秩序が保たれてるっていうのはこういうことなんだって。本当に偉いなと思ったんだけど、この時に、やっぱりみんなね、やっていけないことはやらない。きちんとそういうことをウクライナの人はわかってると教えられた。

## 13 日本のメディアについて

メディア、はっきり言うけど、日本のメディアは駄目。僕はウクライナに行ったが、他のメディアは外務省が渡航禁止勧告を出したので、みんな外務省に従って行かなかった。一般の人はしょうがないと思うが、メディアが行かなくてどうするのか。ジャーナリストが行かないと誰が行くのか。西側のメディアはイギリスのBBCもフランスドゥもドイツのZDFとかアルジャジーラとかみんなとどまって取材をガンガン命がけでやってるのに日本はなんで行かないの。駄目な人たちだなと思った。さっき、NHKは駄目だと言ったが、新聞もそうだった。コンプライアンスとかっていって安全確保みたいなことで、何かあった時に自分たちの責任を取りたくない。戦争現場には積極的に行かなきゃいけないのに行かなかった日本のメディアは駄目だと思った。

戦争が起きた時に何故現場に行かなきゃいけないのかっていうと、戦争になるとメディアも変わる。だから、ロシアの報道とか、ウクライナの報道とかをそのまま流してちゃ駄目なんだ。何故かというと、彼らは戦争になったら勝つための報道をやるだけ。日本も同じことやってた。僕らは、第三国だから、第三者として客観的な報道を出来るのはむしろ僕らなわけだから、本当に行かなきゃ駄目なのだ。同じ出来事について全く違う報道のされ方をする。ロシアとウクライナではザポリージャ原発を攻撃してるのはどっちかについて全く逆のこと言ってる。こういう報道の仕方っていうのは、実はあのアメリカのトランプ政権のときに、ポスト・トゥルースとかフェイクニュースっていうのがキーワードになったんだけども、嘘でもいいから報道してよいと言ってる。嘘でもいいからを報じていれば、それが真実になっちゃうっていうようなことをトランプ陣営は言ってた。本当にひどい世の中になったなという風に思っていたが、僕らは決してそういうふうにしたくないと思っている。さっき寺井弁護士は「戦争になると、真実も最大の犠牲者になる」と言っていたが、僕も本当にそう考えている。

## 14 戦局が変わって、ロシア軍は敗北する

ガルージンっていう駐日ロシア大使にインタビューした時のことだが、最近だいぶ状況が変わってきた。日本のメディアもおそるおそるウクライナに行くようになってきたが、今一番新しいことを言うと、東部ハリキウっていうロシア軍が占領していた地域がウクライナに奪還された。これはもうつい3、4日前のこと。ハリキウっていうところは要衝だが、NATOからの武器供与が凄まじい。しかも最新兵器がもうがんがんがん。ロシア軍は20世紀の兵器を使っている。こんなんで敵うわけない。だってドローンとかそういうのでも最新鋭のもので、ある意味で言うと実験的に圧倒的な量の武器供与を受けて戦うのはウクライナ人と、あるいは傭兵。海外から参加している。そういう人たちがあのものすごい高い士気の元で戦っている。一方、ロシアの人はいやいやながら何かわけのわかんないところに行かされて、兵站も伸び切っちゃって、勝てるわけはないじゃないか。どんどん長期化して行く。これから冬になると、気候が厳しくなる。そうすると冬超えるって大変なことになっちゃう。ロシア軍だってそんな兵站を持ち込まれないっていうことで、ハリキウの奪還というのは転換点になると思っている。これによって戦局は変わる。要するにロシア軍の敗北、敗退というのがはっきりしてくる。

これは戦後史の中で言うと物凄く大きな出来事になって、どういうふうな位置づけが今後されていくか。日本政府は外交をやったように見えるけど、申し訳ないけど何もわかってない人たちだ。ロシアのロの字もわかってない人たちが、今、世界史的な出来事みたいなことについてどういうふうに対応するか、何の地図もわからない、何の経験もない人たちばかりだ。

## 15 ロシア＝プーチンではない

重要なことを言っておきたいんだけど、ロシア＝プーチンではない。僕は4年間ロシアに住んでたけど、ロシアはある意味でいろんな人達がいて、ロシアの中にもプーチン大嫌いな人っていうのがかなりいる。もういやいやながら従っている、あるいは恐ろしいから、逆らったら何されるか分かんないみたいなことでロシアの中では今、口をつぐんでいる人がかなりの人数いる。ロシアから相当な人が国外に逃げてる。まず金持ちのロシア人、そういう人が今海外に逃げてる。あと旧ソ連圏、ロシア語ってとても特殊な言葉なんで、ロシア人って言葉の問題があるから欧米にすんなり行けない。インテリはもちろん英語とかフランス語とかドイツ語とかを話すのですぐ逃げるけど、そうじゃない人たちは、旧ロシア圏のタジキスタンとかウズベキスタンとか、それからグルジアとかそういうところに逃げている。あっちの方が自由なので。

今起きていること、世界的なあのルッソフォビア英語でロシア嫌いって言うのか。「坊主憎けりゃ袈裟までも」っていう諺があるけど、プーチンが嫌なのでロシアは全部嫌だ、ロシア料理なんか絶対食わねーぞとか、今そういうことが実際に起きていて、新宿なんかのロシア料理店が嫌がらせをされたりしている。

ロシア嫌い、例えば芸術家。アーティストでロシアの芸術家っていうだけで「いやもう来ないでください」と言われる。あるいはバレリーナ。ロシアはロシアバレエといって優秀な世界的なバレリーナが多い。ボリショイバレエだってしょっちゅう日本に来ていたではないか。しかし、今は「ロシアボリショイバレエなんて来てほしくない」、「ウクライナのキエフバレエはもういらっしゃってください」みたいな雰囲気になっている。

あるいはオペラ歌手とネトレプコとかね。ロシアには世界的なオペラ歌手がいる。僕がオペラが好きなんだが、すごい人がいる。あまりにもプーチンに近いって有名なゲルギエフっていうクラシックの指揮者がいるが、あらゆるところから追放された。スポーツの分野でも、あのワールドカップからロシアが追放された。テニスのウィンブルドンもロシア人はもうお断り。この間、TBSがやっていた世界陸上。あれもロシアの陸上選手は排除された。

映画監督も被害者。ロシアの映画監督は駄目だっていう話になっちゃっている。これ、皆さんどう思う？本当に僕は深刻な話だっていうふうに思ってる。こういうことが起きるっていうのはとっても良くない。確かにプーチンがやった事っていうのは絶対許されざることだし、ロシア軍の虐殺も酷い。最近も400体ぐらいの身元不明の遺体が発見された。それも拷問の跡があったり、後ろ手に縛られてたりとか、そういうとっても嫌な事があって、それは人道上非難されるべき嫌なことである。だからと言って、ロシアが全部否定されることは駄目だと思う。僕はロシア文学とかも好きなんだが、今はドストエフスキーも駄目になっている。実はチャイコフスキーっていう音楽家も外されている。チャイコフスキーが外されてフランス音楽とかドビュッシーとか、そういうのに差し換えられている。

僕ね、この傾向は本当に問題だと思ってて、ロシア音楽っていうのはオーケストラで言うと、やっぱり壮大なチャイコフスキーもそうだし、ラフマニノフとかね、そういう壮大な大ロシアみたいな形の音楽さえ排除される。だから僕は嫌だって思っている。

僕はこれらの雰囲気はものすごい問題だと思っててね。そのルッソフォビアっていうロシア排斥運動みたいな形っていうのが、これ以上続くのはとても良くないっていうふうに思ってる。

## 16 ロシアの母親たちとベラルーシの人々

ウクライナ戦争はまだ7ヶ月だが、ロシア人も7、8万の軍人が死んでいる。とんでもない数の人間が死んでるって話。その時にロシアって、実はお母さんたちが強くて、ロシア兵士母の委員会連合なんだが、これ実はものすごく有力な団体だ。プーチン政権下でどんどんこの人たちの発言力っていうのは薄れていって、内紛もあったりして、なかなかこれが機能してなかった。しかし、死者が8万っていう数になっちゃうと、その母親たち、ふざけんなって話になる。ロシアっていうのは母親とか、こういう一般の人たちが立ち上がるっていうのは強い。命がけでやっているから。ふざけんなって言う形だ。今怖がってもの言わない人たちも立ち上がる。盤石に見えるあのプーチンの政権基盤だが、今こういう流れみたいなものが強くなってきている。

僕は、あっという間にロシアは凋落するんじゃないかって思っている。それは何でそういうこと言うかというと、

要するに旧ソ連のあの崩壊の過程を見てきたからそう感じている。磐石に見えたあんなものっていうのは、もうほとんど、エリツィンとかゴルバチョフなんかもう見る影もなく、僕はそういう過程を見てるんで、民衆の力とか、声っていうものを侮るとどうなるかってよく知っている。

ベラルーシのことも話しておきたい。大統領を取材した時の話だが、本当にベラルーシに行って良かったと思ってる。ベラルーシの国外に逃げもしないで暮らしている首都圏のやつらだ、怖がってみんな逃げるかと思っていたが、最初に、「ウクライナで起きていることについてどう思うか」、「ロシアが攻め込んだけど」って質問したらね、女の人だったんだが、涙目になって、「絶対に許せない」と言う。いや、びっくりした。ある意味で言うと、それをずっと聞き歩いて、独裁者のインタビューをとるよりも、その人たちの声を伝えられたっていうのが一番良かった。これはあのスヴェトラーナ。ノーベル文学賞を取ったあのベラルーシの作家で、今ドイツに事実上亡命してるんだが、この人は言っている。自分たちの文学の役割っていうのは、小さき人々、こういう、小さい人たちの声を伝えていくっていうのが、自分たちの文学者の仕事だって言うんだ。これはすごい。本当にこの人はすごい勇気のある人だなと思っている。

## 17 おわりに―憲法9条の改悪を断固阻止

まとめに入るけど、日本では、憲法改正の動きが活発化して、衆参で3分の2を確保した改憲勢力によって9条を変えるという非常に強い動きが出てきているが、この間の参議院選挙の自民党の公約の中に防衛費増大、つまり2%っていう枠を簡単に超えてしまうと、日本って世界で三番目の軍事大国になる。正直言って僕は「岸田は何言ってんだ」と思っている。ウクライナ侵攻をバネにしてそういう動きが防衛省をものすごく元気にして、そこと連携している。安保族が中心になっている。が、安倍の事件以降、風向きがちょっと収まってきた。それと経済もおかしくなってきている。生活経済みたいなものと関係のない軍事費を増やしてどうなるという声。

やっぱり民衆の方が賢い。あんなの戦闘機の爆買いの実態みたいなものを知ってしまうと、馬鹿馬鹿しくてやってられないって話になる。もっと言うと、あの沖縄南西諸島の基地機能強化で、自衛隊の基地配備がなされているけど、これもゴリ押しでやってた。今チャンスっていうばかりにゴリ押しでやってて、あのウクライナのようになりたくないだろうと叫ぶ。「台湾を見ろ」みたいな形でゴリ押しで基地配備やったけど、これもちょっと勢いが止まってきた。この間のあの沖縄の県知事選挙の結果。今、僕も分析やってるところだが。なかなか面白い結果が出ている。若い人の支持が自民党の佐喜眞にいってるように見えるが、南西諸島の方は実は佐喜眞が伸びてない。これね、みんなわかってきたって思っている。何かあった時に、結局俺たちが最初にやられるところの場所なんじゃんみたいなことをみんなが分かってきた。それはなかなか面白いと思う。「核シェアリング」、これは亡くなった安倍が言い出した話だが、何言ってんのって話。アメリカの学者なんかも言ってるが、その核のボタンを押す権限を共同管理なんかできるわけじゃない。それは素人でもわかる話だ。安倍という人物が亡くなったことによって、この議論っていうのはずっと後退したことは事実である。

最後にちょっと言っておきたいことがあって、僕、ウクライナにこの7月、二度目に行った時、買ってきたお土産のこと。これはトイレットペーパー話だけど。

これはお土産で買ってきたんだけど、プーチンの顔がカラーで印刷されてるトイレットペーパーで、これを土産にあげたらみんな喜んでね。これをトイレの際に使うと言う。これは大変面白い。汚い言葉を使いたくないんだが僕は「強い者のケツを舐める」という生き方っていうのが大嫌い。僕は45年、テレビ報道の仕事をしてるが、周りを見たり、あるいはジャーナリズム全体の動きっていうのを見た時に強く感じさせられてきた。

「強い者のケツを舐める」生き方っていうのは、僕は嫌になるほど見てきた。もっと言うと、そういう人たちが増えてきた。

僕は「虎穴に入らずんば、虎児を得ず」、相手の懐に入らないと、いろんな情報が入らないみたいなことが言われている。それももちろん大事なことかもしれないが、積極的に「強い者のケツを舐める」っていう生き方って僕は本当に嫌。絶対に嫌だね。

フランスの思想家が書いた「自発的隷従」という言い方があるんだけど、好んで強い者のケツを舐めにいくっていうか、それを好んで自分たちから進んでやる。

それってジャーナリズムが発揮すべき精神とは真逆なものである。僕はそういうことについては絶対妥協できない人間なんで、生きてきたけど、そういうところをいっぱい見てきた。そのため、ぶつかったり、あるいは敵作ったりしてきた。英語の表現でブラウンノーザーっていう言葉がある。ブラウンノーザーは茶色の鼻を持った人。ブラウンノーザーっていうのは、他人のケツを舐め続けていると、自分の鼻がいつの間にか茶色くなっちゃう。「あいつはブラウンノーザー」って言われたら、もうその人は恥ずかしくて生きていけないみたいで。アメリカとか欧米のジャーナリズムの世界でブラウンノーザーになったら、もう終わり。もっと上品な言い方するとアクセスジャーナリストともいう。つまり、俺ってあいつに近いから、あそこに近づけるのは俺しかいないじゃんみたいなもので、これは上品な言い方だが、これはあのウォーターゲート事件でもすごく有名になった。ブッシュ政権の時にどんどん政権にアクセスしてったんで、アクセスジャーナリストっていうふうに言われたりしていた人がいた。とにかく日本の場合、あまりにもそのブラウンノーザーが多すぎて。自分の鼻が茶色くなってるっていうことを気づきもしないまま、生きてる人が多いんじゃないかっていう風に僕は思っている。

今日僕の話を聞いている皆さんは法律家であり、司法の場で活躍されている方々なので、司法の場で何ができるのかっていうのは、釈迦に説法だけど法が健全であるっていうのはものすごく大事なことと思っている。健全な司法っていうのがないとその国の正義みたいなものを司るところがなくなってしまう。そうすると社会は混乱しちゃう。どうせこんなことやったって、裁判だって、どうせ何とかみたいになっちゃう世の中って本当に嫌である。とても怖くなる。

正義が貫かれない社会みたいなものっていうのは、絶対駄目。僕はそういうことが大事だと思ってる人間。それってどこかジャーナリズムと共通するところがある。どうせ俺たちはやっぱりお金儲けのためにやってんだろうみたいな。実は、僕はそういう意味で言うと、自分たちの先輩に恵まれてたっていうか、筑紫哲也さんをはじめその人達は、真実を伝えることこそが金儲けより絶対大事に決まってんじゃんみたいな考えだった。

そう真顔で言ってたね。酒飲みに行ったって、「お前さ、真実を伝えるっていうことの方が金儲けよりよっぽど大事だぞ」みたいなね。そういうことをずっと僕は上の先輩達から教えられてきた。

あとは歴史教育の大切さ。あのウクライナの歴史や現代史もわかんないと、今起きてることが全くわかんない。安保条約や集団的自衛権だって知らない、下手すると今の中学生は日本がその昔、アメリカと戦争しちゃったことさえ知らない。

最後に言いたいのは、僕は普遍的な価値として、戦場を見てきた経験からどんな場合でも人間を殺しちゃ駄目、殺すことってどうしても駄目で、戦争は絶対いけない。生きてないと駄目で、人間として戦争は絶対にいかんということを訴えておきたいと思う。そのために平和憲法9条の改悪は断固阻止しなければならないと思っている。

長い時間ご清聴いただいて、感謝している。

## 金平茂紀さんのお話をお聞きして

ロシアのウクライナ侵攻により、「台湾有事」論や敵基地攻撃能力保持が声高に語られる中で、戦争への道をどうしたら阻止できるかを思い悩んでいましたが、金平さんのお話は一見バラバラに見えたウクライナ戦争、7・8安倍殺害事件と国葬問題、そして旧統一教会問題などを立体的につないでくれました。7・8事件により、「パンドラの箱が開いた」というご指摘、戦後の右派政治勢力と旧統一教会・国際勝共連合の「共振」という解説など、私達の「今」が戦後の憲法的価値をめぐる厳しい闘争の延長線上にあることを改めて教えてくれました。そして、防衛費予算の際限のない拡張論と予備費の恣意的な濫用の中で進行する改憲への策謀を阻止するための、安保法制違憲訴訟の歴史的な重要性を再認識しました。

**大石　哲夫（法テラス元監査室長）**

# 安保法制違憲訴訟の進捗状況

| | |
|---|---|
| 釧　路 | （札幌高裁）　訴訟物等に関する裁判所からの質問に11月18日までに回答。 |
| 福　島 | （仙台高裁）　10月6日に高裁第1回期日が予定。 |
| 群　馬 | （東京高裁）　10月11日に河野克俊元統合幕僚長の証人採否が決定。 |
| 埼　玉 | （東京高裁）　10月13日に小西洋之参議院議員の証人尋問。 |
| 東京国賠 | 最高裁に上告中。 |
| 東京差止 | （東京高裁）　9月26日に結審。判決は2023年2月16日。 |
| 女の会 | （東京高裁）　控訴後、第1回期日が未指定。 |
| 神奈川 | （東京高裁）　10月11日に進行協議。 |
| 山　梨 | （東京高裁）　10月3日に長谷部恭男早大教授の証人尋問予定であったが、直前になって平田豊裁判長の人事異動を告げられて延期。期日は追って指定。 |
| 長　野 | （東京高裁）　10月4日に石川健治教授らの証人尋問請求を却下。直ちに忌避申し立て。 |
| 愛　知 | （名古屋地裁）　10月28日に結審。 |
| 京　都 | （大阪高裁）　裁判官がコロナに罹患し、期日指定が未定。 |
| 岡　山 | （広島高裁岡山支部）　期日指定がないままの状況。 |
| 広　島 | （広島高裁）　裁判所から、10月17日までに人証申請、追加の主張、証拠については11月18日までに全て提出するように訴訟指揮あり。次回結審となる可能性。 |
| 山　口 | （広島高裁）　控訴審が1回で結審したため、弁論再開の申立てを提出。裁判所が応じなければ、忌避を行う。 |
| 高　知 | （高知地裁）　差し戻されて高知地裁で審理中。 |
| 福岡国賠 | （福岡高裁）　差止訴訟と同じ部に継続。10月1日に控訴理由書を提出。 |
| 福岡差止 | （福岡高裁）　2023年2月に青井未帆教授の証人尋問予定。 |
| 長　崎 | （福岡高裁）　11月11日に半田滋氏の証人尋問。 |
| 大　分 | （福岡高裁）　11月9日に最終弁論で結審。 |
| 宮　崎 | （福岡高裁宮崎支部）　重要な証拠である長谷部恭男証人の尋問調書が間に合わないことを説明して、続行を要望したが、次回結審の姿勢を崩さなかったため、忌避申立てを行った。 |
| 鹿児島 | （福岡高裁宮崎支部）　10月21日に高裁第1回期日が予定。 |
| 沖　縄　大　阪　札　幌 | 上告せず。 |

## 編集後記

「全国ネットワーク報」の今号は、特集としての金平茂紀さんの講演の記事と「安保法制違憲訴訟」の進捗状況だけで過去最大の12頁となりました。現在、このネットワーク報は全国の弁護団や市民の方々7000名以上にお読みいただいていますが、今号を踏み台としてさらに平和運動が発展していくことを心より祈念しております。　**（編集委員：寺井一弘、武谷直人、島村海利、有岡佳次郎、山口宏弥）**

**安保法制違憲訴訟全国ネットワーク**

〒169-0074 東京都新宿区北新宿2-21-1 新宿フロントタワー14階
電 話：03-6706-4758　FAX：03-6868-4999
Mail：signature@anpoiken.jp　Web：https://anpoiken.jp



2022年10月10日発行